

■司馬凌海　　蘭方医。語学の天才で、日蘭英独の4か国語に通じ、仏露希羅も読み書きに不自由しなかったが、早世。

しばりょうかい

蚕社の獄・・1839＝　　佐渡の新町で半農半商の島倉栄助の長男として生まれた。

阿部正弘首座1845＝　6歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1848＝　9歳：

国定忠治磔・1850＝11歳：江戸へ出て唐津藩儒山田寛に師事し、

万次郎帰国・1852＝13歳：幕府医官松本良甫に入門、医学を習う。

ペリー来航・1853＝14歳：　さらに佐倉の順天堂に入塾、蘭方を学んだ後、帰省。

蕃書調所・・1857＝18歳：松本良順に呼び返され、ボンベの医学伝習生として長崎へ赴く。
　ボンベの薬理学講義で得た知識を、関連洋書に照して増補し、自己の見解を加えて洋薬7種について解説した「七新薬」を著わし、

桜田門外変・1860＝21歳：

遣欧使節・・1861＝22歳：九州巡遊に出、平戸藩医岡口等伝宅に迎えられ、長女の婿となった後、

生麦事件・・1862＝23歳：*刊行した。本書は「化学」の語を使用した本邦最初の刊本であり、薬品の有効成分を明記する近代薬物書としても先駆となる。

禁門の変・・1864＝25歳：祖父に説得されて入婿先を去り帰郷、新町で開業。
　相川奉行鈴木重嶺に認められ、詰医師兼洋学師範となる。

薩長同盟・・1866＝27歳：

大政奉還・・1867＝28歳：幕府雇傭鉱山師ガワールの通訳も務め、

明治維新・・1868＝29歳：維新で、東京に出て医学校三等教授となり、イギリス医ウィリスの通訳となる。

初の日刊新聞1870＝31歳：少博士に進む。医学校教師オランダ人ボードイン、ドイツ人ミュルレルの通訳を担当。

ミュルレルは結婚11年のフランス人のミュルレル夫人よりドイツ語が上手と言った。

学問のすすめ1872＝33歳：*大助教となり、大学東校教場管理を命じられた。「和訳独逸辞典」を編刊したが、これも本邦初めてのドイツ語辞書である。ミュルレルが皇室待医となり、凌海も宮内省兼務となったが、

明治6年政変　1873＝34歳：

初の民間工場1875＝36歳：*その帰国とともに解任された。暫く下谷練堀町に日本最初のドイツ語塾春風社を開くうち、元老院少書記官となったが、法律用語にはなじまなかったか直ぐ辞職。

三つの内乱・1876＝37歳：愛知県から招かれて病院医員兼医学教師となり、オーストリア人医師ローレッツの通訳を務める。

西南戦争・・1877＝38歳：辞職して名古屋で開業したが、

大久保暗殺・1878＝39歳：肺病で倒れ、京都や熱海で療治に努めたが、

沖縄県編入・1879＝40歳：東京で診断を受けに向かう途中、神奈川県戸塚で没した。